



お茶の爪又予大学

貴重資料紹介

武村耕靄筆「百合図」



文教育学部教授 秋山 光文

6月12日に举行された「お茶の水フェスティバル」の会期に合わせ、「お茶大所蔵貴重資料展示会」が生活科学部会議室で開催された。これは、大学資料委員会がこれまで続けてきた学内調査で明らかにされた絵画作品をはじめとする貴重資料と、それに伴う修復事業の成果を公開するもので、そのなかには本作品のように1世紀近くほとんど紹介される機会を持たなかったものも含まれている。今回展示された絵画作品は全部で8点で、そのうち3点は武村耕靄の筆になる。

本作品は、大学資料委員会の進めていた学内資料調査の際に、徹音堂脇の倉庫から発見した大層痛んだ状態の小屏風であった。画面右下に記された「耕靄女史」という落款から、作者が武村耕靄であることはすぐに判明したが、作品全体に及んだ退色と下地の絹の劣化は経年変化の域を超えており、直ちに補修と保存作業が求められた。修復専門家により、下地から慎重に絵画部分だけをはぎ取った後に、全体に洗浄を施し、改めて裏打ちを行い、最後に額装としたものが今回展示されたのである。

本図は、画面右側に大きく描かれた百合を中心として、オダマキやアゲハ蝶など夏の情景が構図の右下側を占めている。一方、画面左にはススキやワレモコウなど秋草が一群と

してやや小さく表され、遠近法を用いながら構図全体に奥行きを感じさせる試みがなされている。

武村耕靄（本名千佐）は、東京女子高等師範学校の創設当初から絵画担当の教授として就任した女性画家で、嘉永五（1852）年11月25日仙台藩士の娘として江戸芝口に生まれている。山本琴水・春木南溟について文晁派の南画を習得するかたわらで、川上冬崖の画塾である聴香読画館に入門し、洋画も学んでいる。

こうした耕靄の画歴を物語るように、本図の百合の表現には明らかに西洋画からの技法的影響が看取され、また遠近法を用いた構図も伝統的手法から脱却した近代日本画の息吹が感じられる。その一方で、秋草の描き方には伝統的な筆遣いも認められ、本図の制作目的は明らかではないものの、鑑賞画というよりもむしろ学生たちにさまざまな技法を教授するために描いた、絵手本としての性格を帯びていたと推察される。花鳥画を得意としたといわれる作者の多彩な技法が看取できる作品である。制作年代は不明だが、明治20～30年頃ではないだろうか。

（大学資料委員会委員）